

## 令和4年度 徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館協議会

### 【日時】

令和4年10月6日（木）午後1時30分から午後3時30分まで

### 【場所】

徳島県立博物館 講座室

### 【出席委員】（50音順、敬称略）

安倍 久恵（フリーアナウンサー、佐古絆文化協会事務局）〈副会長〉

生駒 佳也（徳島県立阿南光高等学校教諭）

塩瀬 隆之（京都大学総合博物館准教授）

瀬戸 恵深（株式会社エフエムびざん放送部ディレクター）

西 記代子（四国大学文学部講師）

原 多賀子（京都外国語大学非常勤講師）

町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）〈会長〉

森脇佳代子（阿南市立羽ノ浦小学校PTA人権教育広報研修部役員）

※欠席2名

- 1 開会
- 2 館長挨拶
- 3 委員紹介
- 4 議事

- (1) 令和3年度事業実施状況について
- (2) 令和4年度予算及び事業概要について

### (1) 令和3年度事業実施状況について 質疑応答

委員	鳥居龍蔵記念博物館のニューズレター創刊号が発行されたということだが、ホームページで公開しているか。
事務局	鳥居龍蔵記念博物館のホームページについては、台湾との国際交流の内容も含めて、現在再構成を進めている。まだ、ニューズレターのオンライン公開には至っていないが、今後、他の出版物を含め、ホームページ上からダウンロードできるようにする予定である。
委員	近年は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、何でもインターネット上で情報を入手することが多くなった。鳥居龍蔵記念博物館の出版物についても、インターネット上で入手しやすい環境をつくっても

raitai。

委員

徳島県立博物館の常設展リニューアルから1年以上が経過した。その後、自分の周りの30人ほどに博物館についての感想を聞いてみた。2～3割はそもそも博物館に行ったことがないとの返答だった。それ以外からは、具体的なコメントを得られたので紹介したい。

最も多かった意見は、「体験コーナーを増やしてほしい」というものである。この内のひとは企画展「ネコ展」を観覧したが、もう少し気軽に体験できるものがあったらよかったという感想だった。コロナ禍で仕方がないところもあるが、今後は体験コーナーについても考えてもらいたい。

鳥居龍蔵記念博物館については、新聞記事を読んで興味をもったという中学生の保護者がいた。また、「学校教育と連携してほしい」という意見が複数あり、「授業の中で鳥居龍蔵について学習する機会があればうれしい」との意見もあった。さらに、自由研究でも活用したいという声も複数あった。

県立博物館と鳥居龍蔵記念博物館の両方に共通する点として、乳幼児の親の意見で、子どもが館内で騒ぎ資料を傷つけてしまうことが心配だというものがあった。そのため、親の方が神経質になり、館内に入るのに二の足を踏んでしまうようである。

鳥居龍蔵記念博物館の入口について、やや重厚で入りづらい雰囲気があるという意見があった。入口の色使いや照明が暗いことにも原因があると思うが、もう少し気軽に入れるような工夫をしてほしい。

その他の意見として、「学芸員と直接会話をしたことで資料について興味を持てた」という意見が複数あった。たとえば、キノコについて図書館で調べたが分からなかったため、学芸員に質問したところ、親切に対応してくれたとのことだった。

事務局

ここ30年ほどの間で、博物館への来館者のタイプが変化しているように感じる。来館者が求めるものすべてに応じることはできないが、ニーズを適切にくみ取りながら、博物館の理念と照らし合わせて運営する必要がある。

新常設展の体験コーナーの一例として、三好長慶のデジタル塗り絵がある。来館者が、博物館に親しみをもってもらえるよう、博物館資料とリンクした体験コーナーの充実は重要であると考えている。

博物館の展示室は、「おしゃべり」を禁止している場所ではなく、むしろ節度を持ってコミュニケーションをとっていただければと思う。博物館は社会教育の場でもあり、利用する時のマナーも学んでほしい。鳥居龍蔵記念博物館について、博物館と同じように、学校から出前授業のリクエストがあれば行くようにしている。また、小学校の道德の

教材に鳥居龍蔵が取り上げられており、注目してくれる先生もいる。なお現在、鳥居の出身校の徳島市新町小学校で移動展示を実施しているが、今後も、可能なかぎり博学連携につとめたい。

委員

博物館でハンズオンなどの体験をすると、資料についてより親しみや興味がわくと思う。そのため、体験型の展示がもっとあれば良い。常設展内には、サヌカイトをたたいて音を鳴らすコーナーがある。同様に、常設展示室内で、恐竜化石の発掘体験ができればと思う。たとえば、安全に十分配慮した上で、ハンマーを使って恐竜化石を含む岩石をたたくような体験はできないか。

鳥居龍蔵記念博物館については、全国の動向と徳島との関わり、または徳島ならではの動向など、調べる機会の紐づけをできれば、生徒自らの発見につながると思う。

また、「博物館ニュース」127号の記事で青色片岩と緑色片岩の違いについて紹介されていた。博物館ニュースの記事の内容と、もし関連資料が展示されているならば展示場所がすぐに分かるようにしてはどうか。

最後に、文化の森総合公園には多くの人々が来ているが、その割にバスの便数が少ない。バス会社と調整して、少しでもバスの便を増やしてもらうことはできないか。

事務局

文化の森へのバスの増便については、関係課とも相談したい。恐竜化石発掘体験については、普及行事のなかで年3回実施している。

非常に人気の高い行事で、定員15名に対して200名を超える方から申し込みをいただく時がある。展示室内での発掘体験については、実物のハンマーを展示室に設置するのは、やはり安全面で問題があり、むずかしい。木製のハンマーを代用するなど、検討してみたい。

委員

これまで博物館に行ったことがない初心者にとっては、入館自体ハードルが高いように感じるかもしれない。たとえば、「あすたむらんど徳島」のプラネタリウムでは「初めてプラン」というものがあり、初めて間口を広げる企画がある。博物館でも、ホームページや展示室の入口などに、短い時間で見ることのできる紹介動画があれば、初めて来た人でも入りやすくなると思う。

委員

「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」については、これまで教員の立場として参加してきたが、広がりがある試みであるため継続してほしい。

高校への出前授業の件数がゼロとなっているが、これは教員としても実感するところがある。高校でアンケートを取ったことがあるが、99

人中27人は博物館に行った経験がないという結果だった。「徳島歴史文化フォーラム」の知名度は上がってきているものの、まだまだ一部の教員が知っているだけである。

高校生のアンケートの回答のひとつに、「博物館は学校の授業で行くところ」というものがあった。つまり、普段の生活では行かないことを意味している。学校側の体制（就職や進学から逆算してカリキュラムがつくられていること）にも問題があるが、社会教育施設である博物館側も、引続き情報発信してもらいたい。

事務局

高校生と大学生は、博物館の利用が最も少ない世代である。この点については、なかなか解決策を見いだせないでいる。「鳥居龍蔵記念徳島歴史文化フォーラム」については、令和4年度も応募を開始しているが、高校については反応が弱くなっている。「全国高校生歴史文化フォーラム」の応募は一定数あるので、徳島県内の事情によるものかもしれない。広報は積極的に行っているが、参加する高校生に向けての何らかの動機付けを行う必要がある。

委員

高校の教員の場合、教員免許更新のための講習がなくなったため、教育委員会では教員向けの研修をどのようにするかで課題を抱えている。たとえば、教員向けの「アクティブラーニング」の教材として鳥居龍蔵や関連資料を提供してはどうか。それに関連して、以前、化学担当の高校教員を集めてノーベル化学賞についての講演を行ったことがある。ねらいは、まず教員に知ってもらうことであった。同様に、高校の教員向けの研修で博物館を活用するのが良いと思う、

「博物館に来ると緊張する」という意見が出るのは、遠足などで博物館を訪れた際、教員から静かにするよう注意された経験に原因があるのではないか。

遠足や修学旅行で博物館を訪れた生徒がいた場合、にぎやかに博物館を見学してもらうのも一つの方法だと思う（博物館で「楽しい」を経験させる）。遠足などで学校が博物館を利用する場合、あらかじめ日時が分かっているならば、他の来館者に事前にその状況を伝えることができる。

または、博物館をにぎやかに利用してもよい曜日を設定しておく（にぎやかと静かのメリハリをつける）のも方法の一つである。博物館での良い記憶や楽しい経験がない、小中学生の時の博物館体験を変える必要がある。

鳥居龍蔵記念博物館については、鳥居が調査した台湾を通して、現在の国際情勢などを学ぶきっかけになれば良いと思う。

インターネットによる情報発信について、ホームページをつくっても若者はあまり見ない。インスタグラムやツイッターなどのSNSを利用

するケースが多い。インスタグラムの検索に引っかけられないと、若者は博物館に来ない。その点について、京都府亀岡市の歴史博物館の事例を紹介したい。

その博物館では、中学生・高校生と一緒に地元のお祭りをPRするプロジェクトを実施した。つまり、博物館に来てほしいターゲットと一緒にインスタグラムやTikTokを作るなどして、中学生・高校生の目線で、情報発信をすることが大事である。博物館が完成したものを提供するという形から脱却して、一緒に何かをつくっていく形になれば良いと思う。この点は、これまでの議論にも通じるところがある。つまり、「博物館は、黙って、静かに見て、教わるところ」という価値観を変える必要がある。

なお、以前、この博物館の常設展リニューアルの過程でインクルーシブデザインのワークショップを担当したが、実際のところ博物館を利用している外国人や障がい者の数はどれくらいか。

事務局

高齢者と障がい者の人数については、「年報」31号の82ページに、無料観覧者統計をとりはじめた平成24年度から令和3年度のデータがある。令和3年度については、高齢者と障がい者を合わせて3,894人が来館した。

令和3年度は博物館の常設展リニューアルの効果もあり、他の来館者と同様、多く的高齢者と障がい者が来館している。

委員

博物館を利用する高齢者の比率は、どの地域においても増える傾向にある。ただ、次世代を担う子どもたちにも博物館を見てもらう必要がある。子どもたちに、自分が生まれ育った土地に愛着をもってもらう、また知ってもらう上で博物館を活用してもらうことは大切である。その点で、先ほど話題にあがった交通インフラの整備も重要である。

委員

バスの本数や時間帯のことで、追加で発言したい。先日訪問した、ある県の美術館では、博物館を経由するバスの本数は多く、バスの発着の時間帯も一定の規則があり分かりやすかった。文化の森にアクセスするバスの本数が増えれば、これまで博物館を利用していなかった世代も博物館を利用してくれるようになると思う。

事務局

以前は、文化の森直通のバスの本数は多く、またラッピングバス（広告車両）もあった。バスの本数やダイヤについても、関係課を通してバス会社に働きかけをしたい。

## (2) 令和4年度予算及び事業概要について 質疑応答

委員	令和4年度予算及び事業概要の説明の中には、人件費は含まれていないということだが、学芸員は調査研究から普及教育まで様々な事業を行っている。近年の博物館法改正もあり、仕事の幅が広がっている中で、学芸員の負担が増加していると思う。これを機に、学芸員の増員やミュージアムエデュケーターの導入などを検討してはどうか。
事務局	<p>博物館の業務としては、常設展のリニューアルが完了し、一山越えたという感じはある。これまで、常設展リニューアルに注力していたエネルギーを、今後は調査研究をはじめとする基礎的な業務に戻していく必要がある。それにしても、博物館の業務量が、以前と比較すると増えていることは確かである。これに対して、学芸員採用の前倒しを行うなど、可能な範囲で対応している。また、定年退職者を再任用するなどして、安定的に業務を遂行できるよう人員確保に努めている。鳥居龍蔵記念博物館については、専任の担当職員は3名のみであり、県立博物館の職員が兼務し補っている部分がある。ただし、兼務することによって業務の幅が広がるのは確かであり、それによって新たに得るものもあると思う。</p> <p>改正博物館法では、文化観光や地域貢献が重視されている。また、ICOMによる新しい博物館の定義の中でも、コミュニケーションの重要性が示されている。当初から博物館が取り組んでいた側面もあるが、博物館としても、さらに新たな方向を踏まえていかねばならない。県民の利用はもちろん大事だが、県外や国外からの来館者を増やすことも重要であると考えている。そのため、現在、海外からの観光客向けの展示解説書を作成している。また、誘客について、観光協会や関係課などに声をかけるなど、外部の協力も借りながら、より多くの人々が博物館を訪れる仕組みづくりを考えている。</p>
委員	学芸員採用は予算と密接に関わり、むずかしい点もあると思うが、博物館や文化の価値をより一層県民に浸透させていくことが大切だと思う。
委員	博物館法改正によって、確実に学芸員の負担が増える方向になっている。ミュージアムエデュケーターなどを含め、博物館について素養や理解がある人に支援してもらえると有意義だろう。
委員	しばしば「博物館は人である」と言われる。今後は、学芸員の仕事の継承も大事になってくると思う。

事務局	文化の森の建設段階に採用された学芸員の退職が近づいており、世代交代が進みつつある。博物館の雰囲気も大きく変わるだろう。学芸員の仕事の継承を行いながら、変化する部分があってもよいと思う。
委員	<p>学芸業務の継承に関わって、若干コメントしたい。博物館法改正にあたり、博物館資料をデジタル化し保存すること（デジタル・アーカイブ化）が加えられた。ただし、デジタル・アーカイブ化には危うさもあり、博物館資料をデジタル化すれば資料が残り、継承できると思われがちであるが、実際にはそう簡単ではないだろう。データの残し方を考えない限り情報は残らない。</p> <p>これまで博物館が培ってきた技術である「集めて」、「守って」、「見せる」を使えば資料を来館者に簡単に見てもらうことはできるが、デジタル化されたものを見てもらうことは課題があり、限界もある。今後30～50年の間に、博物館は資料をどのように残し、どのように守り、どのように見てもらうのか、大きく変わる可能性がある。博物館は、歴史の残し方と見せ方について、次の世代とともに考え、情報を共有していく必要がある。</p>
事務局	これまでの業務を継承する上で、収蔵庫の問題（収蔵資料の増加にともなうスペース不足）がある。博物館だけが直面している課題ではないので他施設と連携しながら対処を考えていかねばならない。デジタル・アーカイブは「両刃の剣」で、メリットとデメリットを勘案しながら、今後も資料の残し方や見せ方について継続して考える必要がある。
委員	<p>私の周辺の人意見として、「一般向けの鑑定会を週末に行ってほしい」というものがあった。また、別の方からは、「初めて博物館を訪れたとき、駐車場から博物館入口までの距離があり、看板表示をもっとわかりやすくしてほしい」という要望があった。</p> <p>さらに、これまでの議論の感想として、子ども時代に博物館に足を運んでいないと大人になっても博物館には行かないと思う。子どもの時に、「博物館は楽しい場所」というイメージを持ってもらうことが大切だと感じた。</p>
委員	先日、「すだちくん森のシアター（円形野外劇場）」で、午後4時開始のイベントがあった。しかし、夜間は文化の森を経由するバスの便はなく、公共交通機関を使って文化の森に行くことはできない。その一方で、「とくしま動物園」が開催した「夜の動物園」というイベントでは、市バス臨時便が運行されていた。文化の森においても、夜間にイベントを行う時は、バスの臨時便を運行してもらうよう働きかけ

をしてもらいたい。

委員

常設展リニューアルから1年余が経ち、リニューアル後しばらくは話題性もあり多くの人に関心を持っていたが、最近は「博物館、リニューアルいつしたの？」という声も聞く。一般の人にとっては、博物館の情報は必ずしも容易に届くわけではない。博物館に興味がない人に関心を持ってもらうことは非常にむずかしいと思う。また、知人の意見では、「リニューアルした常設展の内容がむずかしい」という声もあった。このように、専門的な知識を伝えるという点でむずかしさを伴うが、今まで通り頑張ってもらいたい。

大学の授業で、考古学や歴史学のような専門分野をもたない学生と接することがある。そのような学生に、博物館の何に興味があるか聞いてみたところ、学芸員の仕事そのものにも興味があるということだった。たとえば、展覧会開催までの苦労話や資料収集の経緯などが分かると、学生に限らず一般の方にも興味をもってもらえるのではないかと。博物館の裏（学芸員の仕事）を紹介することも、方法のひとつかもしれない。

委員

様々なご意見をいただいていた。これまでの議論を通して、いくつかコメントをしたい。博物館常設展の「歴史・文化コレクション」で紹介されていた「太布」や、「博物館ニュース」で取りあげられていた「半田漆器」などは、いずれも地味なものかもしれない。しかし、半田漆器のように、昔は日常的に使用されたが現在はつくられていないようなものについて博物館で調査研究を行い、掘り下げていくことは意義があると思う。

常設展の中で、「園瀬川の生きもの調査」についての報告があった。生きものと川の環境、両方を考えさせるような展示内容であり、とてもよいと感じた。その他にも博物館では、タンポポや漂着物、外来生物など、「自然と暮らし」を考える展示が意識されている。グローバルな地球規模のテーマだけではなく、身近な環境に触れることで、自分たちの生活がどのように維持されてきたかを考える展示になっている。博物館は、地域から見た環境を考える上での最前線であり、窓口でもある。博物館における「総合性」を考える上で、環境はキーワードになると感じた。

以上で、会議を終えるが、二つの博物館がよりよい方向に発展するよう、本日の提言や意見を活かしていきたい。

事務局

長時間にわたり、様々なご意見やご講評をいただき、お礼申し上げます。博物館については、常設展示室のリニューアルをもって終わりではなく、さらにアップデートしていかなければならない。現在、誘客促進事業



を行っているが、その中で展示改善に取り組んでいるところである。鳥居龍蔵記念博物館では、台湾との交流事業が大きく動き出そうとしている。両館そろって、前進を図っているところであり、だからこそ、本日の議論にあがった多くの課題、とくにバスの便、高校生・大学生の関心を引きつけることなどについては、検討を深めて参りたいと思う。

引き続き、委員の皆様のご指導をお願いする次第である。